



復元船「サン・ファン・ハウティスタ」号（宮城県石巻市）

第1回宮城県中学生

水の作文コンクール

作品募集！

○テーマ

「水について考える」(題名は自由)

「水」をテーマにした作文を募集します。

「水」とは、みなさんにとって、どんな存在ですか？

暮らしの中での体験や、授業で学んだこと、調べたこと…

この夏、皆さんにとって大切な「水」への思いをつづってみませんか？

○応募資格

令和6年度に宮城県内に在学中の中学生

○応募締切日

令和6年9月30日(月)必着

○原稿(記載事項)

- ①400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ②本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)学年、氏名(ふりがな)を明記

○問合せ・送付先

〒980-8570 仙台市青葉区本町3丁目8番1号

宮城県環境生活部 環境対策課 環境影響評価班 あて
問合せ先 電話:022-211-2667(直通)

Eメール:kantaie@pref.miyagi.lg.jp

○表彰(予定)

【1年生部門】【2年生部門】【3年生部門】

各部門:優秀賞1作品、入選1作品、佳作2作品

※1年生部門と2年生部門の優秀賞、入選作品は次年度開催予定の第47回全日本中学生水の作文コンクール中央審査会に推薦します。

★作文作成のポイント★

○水にまつわる、自分ならではの体験や学習をもとに考えたことを書いてみよう！

○自分の意見や、今後の抱負を書こう！

↓県HP



裏面に参考があるよ！

★作文作成のポイント(過去の受賞作品をもとに)★

第40回(平成30年度)全日本中学生水の作文コンクール内閣総理大臣賞(最優秀賞)

時をこえて〜未来へ〜

雪どけを迎えた春、私は「ダムより高い鯉のぼり」の記事を新聞で見つけ、釜房ダムを訪ねました。目の前に広がる森と湖。優雅に泳ぐ鯉のぼり。そんな美しい春の景色を、一枚の風景画として残したいと思ったからです。

釜房ダムとは、私の住む仙台市より西の、宮城県ほぼ中央を流れる名取川の支川、碓石川上流の川崎町という小さな町に作られた特定多目的ダムです。上流の太郎川、北川、前川より集められた水は、ダムによる釜房湖となり、私が訪ねた日も、湖いっぱい満たされた水一面が、は瑠璃色に、時々太陽の光を浴びて金色に輝いて見えました。むよように連なる山々の緑、春を知らせる満開の桜の淡い紅色、一トから流れ出るしろかね色の水、そんな風景画のような世界の源であり、この地球が「水の惑星」と呼ばれる由縁なのでしょう。水資源に恵まれていない国が数多くあると聞いています。は、水資源に恵まれていない国が数多くあると聞いています。と呼ばれる地球であっても、利用可能な淡水の割合は極わずかで、とんどが海水、私たち人間をはじめ、あらゆる生物が生きるために使われる水ではないのです。

水にまつわる自分独自の体験を書こう

この三月に訪ねたシンガポールもまた、水問題を抱えた国の一つでした。赤道直下に位置し、年中気温と湿度が高く、降水量も多い国であるのに、狭い国土には大きな河川も雨水を貯める土地もありません。さらには国土自の保水力も乏しいことから、飲み水のほとんどを隣国からの輸入に頼っていると聞きました。飲み水が手に入らないわけではないのですが、滞在初日に、蜜柑色をした三〇ミリットルのボトルを渡され、滞在期間中は、毎朝このボトルに水を入れて持たされることになりました。水を贅沢に使う観光が有名な都市の、現実の水問題に私は

冒頭で読み手の興味を引く工夫をしよう

強い衝撃を受け、いつも以上に水を大切にいただくよ、シンガポールの水事情を思い出しながら、私は自分ことを考えました。日本には四季があり、梅雨や秋雨降水量に大きな変化はあるものの、世界的に見れば、はずです。自宅にも学校にも、街のいたる所に水道がをひねれば、水やお湯がすぐに流れ出ます。そのため、いくらでもあるものたえに「湯水の如く」と使う水は、本当にいくらでもあるものなのでしょうか。

水にまつわる自分独自の体験を書こう

ました。その蛇口、一年の水環境の日本人は、果たして

体験・学習を踏まえた自分の意見・抱負をかこう

私の忘れかけていた記憶、忘れようとしている記憶、小学校一年生も終わろうとしている春のあの日まで私は、水のない生活をしたことも、考えたこともありませんでした。蛇口から水の出ない日々、やつと水を手にできた時の喜びを、私は忘れられません。空から容赦なく降る雪も、沿岸の町を襲った津波もまた、水の別な姿であることが恨めしく、未来の見えない不安に誰もが涙を流した日々。時間という魔法が、少しずつ人々の心を癒やしてくれてはいるものの、何かを皮切りとし、水の隠された本性、恐ろしい姿を度々思い出すのです。あの日から、水に対する私たちの見解は確実に変わりました。水を大切にすると同時に、いつの日か再び変貌する水の姿に警戒し、備えるための訓練が続いています。

釜房湖の美しい水を眺めながら、ふと、かつてのこの湖の下に存在した豊かな耕地の広がる小さな町のことを考えました。そこに暮らしていた人々の思いと、今、目の前に広がる美しい湖とダムが、現在の私たちに不自由なく水を提供しているという現実をです。

残すべき水の歴史は、震災だけではありませんでした。今日見たこの美しい風景を、私は過去と共に未来へ描き残したいと思えます。